

## 中国語を母語とする日本語学習者の多義動詞の未知拡張義の意味推測 — 習熟度、拡張義の種類及び文脈情報量の影響に着目して —

崔 暁文

日本語の多義動詞は日常生活における使用頻度が高く、第二言語（以下、L2）習得でも初期段階で導入されることが多いため、習得が容易だと考えられがちである。しかし、多義動詞は一般に複数の意味を有するため、その意味は使用された文脈によって常に変わってくる。L2 学習者は読解文で多義動詞の新たな意味に遭遇した際、それを既知の語義で解釈し、誤って理解することが多い。そこで、本学位論文は中国語を母語とする日本語学習者（以下、CJL）を対象に、中心義が既知の日本語多義動詞の未知拡張義の意味推測に影響を与える要因及び推測の際の知識源使用について検討した。

本論文は4つの研究から構成されている。研究1では、習熟度、拡張義の種類（中心義との意味的関連性の高さ）及び文脈情報量の3つの要因が多義動詞の未知拡張義の意味推測の正確さに及ぼす影響について検討した。その結果、CJLの習熟度が高く、中心義との意味的関連性が高い拡張義を持つ語、実験文の文脈情報量が多いほど、既知の中心義に縛られずに推測に成功しやすかった。

研究2では、CJLの意味推測の発話プロトコルを用いて、推測の際の知識源使用の種類と数について検討した。その結果、多義動詞の意味推測では、主な知識源4種類、詳細な知識源16種類の使用が観察された。主な知識源分類から見ると、使用頻度が最も高いのは「文レベル」と「語レベル」であり、「世界知識」と「L1 ベース」はほとんど使用が見られなかった。そして、主な知識源の使用頻度には3要因による相違があまり見られなかった。詳細な知識源分類から見ると、使用頻度が最も高いのは「文全体の意味」と「共起語」、次いで「中心義」、たまに使用されたのは「対象語の漢字」と「他の拡張義」であった。「文の文法」、「世界知識」、「一部の語句」、「L1 語の共起」、「語の形式」の順に、わずかながら使用が見られたが、「語の連想」、「既知」、「語の共起」、「間違った語義知識」、「L1 語の形式」、「句読点」は全て1%以下であり、ほとんど使用が見られなかった。なお、各種知識源の使用頻度は3要因によって相違が見られた部分もあった。

一方、全体的な傾向として、CJLは単一の知識源使用より、複数の知識源使用を好む傾向が見られた。全体的な知識源使用数には習熟度の影響が見られず、拡張義の種類と文脈情報量の影響が見られた。中心義との意味的関連性が高いほど、文脈情報量が少ないほど、知識源使用の数が有意に多かった。一方、1つの語の推測につき使用された知識源の数は3個と2個の場合が最も多く、4個と1個の場合も見られたが、5個以上の場合はほとんど見られなかった。そして、知識源使用数は3要因によって相違が見られた部分もあった。

研究3では、CJLの知識源使用（種類と数）と推測の正確さとの関係について検討した。その結果、知識源使用の種類と推測の正確さとの関係については、主な知識源分類から見ると、推測の正確さが有意に高かったのは「世界知識」であり、有意に低かったのは「L1 ベース」であった。詳細な知識源分類から見ると、推測の正確さが有意に高かったのは「世界知識」と「中心義」であり、有意に低かったのは「文の文法」、「他の拡張義」、「語の形式」、「対象語の漢字」、「間違った語義知識」であった。

一方、全体的な傾向として、知識源使用数が多いほど推測が成功しやすいことは観察されなかった。しかし、1つの語の推測につき使用された知識源の数によって推測の正確さに差が見られ、知識源使用数が1個の場合はその他より有意に低かった。ただし、複数の知識源が使用された場合、知識源使用数が増え

でも推測の正確さが有意に上がることはなかった。

そして、推測が成功しやすい者と推測が成功しにくい者の知識源使用の組み合わせパターンを詳しく検討した結果、それぞれの推測特徴が明らかになった。

研究 4 では、推測の直後及び 2 週間後に意味の保持が見られるか、保持の効果は 3 要因の影響を受けるかについて検討した。その結果、各時期のいずれの間にも得点の有意な差が見られ、得点は意味推測活動、直後テスト、遅延テスト、事前テストの多い順となっていた。つまり、CJL は確実に一部の多義動詞の新たな拡張義を獲得し、且つ長期的に保持していた。なお、3 要因が意味保持に及ぼす影響に着目すると、習熟度と拡張義の種類の影響は直後テストでも遅延テストでも見られた。一方、文脈情報量の影響は直後テストでは見られたが、遅延テストではほぼ消えていた。

本研究は CJL を対象に、習熟度、拡張義の種類及び文脈情報量の 3 つの要因が日本語多義動詞の未知拡張義の意味推測の正確さ・保持に与える影響を明らかにし、推測の際の知識源使用（種類と数）及びそれらと推測の正確さとの関係について検討することで、多義動詞の未知拡張義の意味推測のメカニズムを少しずつ解明してきた。日本語多義動詞の意味推測研究が限られている中、これらの課題を実証的に検討したことは大変意義があると思われる。また、今後多義動詞の語義指導にとっても有用な知見を提供できたと考えられる。